
銀魂～鬼刃の日常～

美緒奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂〜鬼刃の日常〜

【コード】

N9933X

【作者名】

美緒奈

【あらすじ】

真選組に入隊した彼女の笑える物語！気軽に立ち寄ってください

< ^ ^ ^ >

第一話初めはやっぱりこんなまんぢょう？（前書き）

初めての投稿ですので少し甘めにみてやってください。

第一話初めはやっぱりこんなもんでしょ？

やっと・・・やっと会える…江戸往きの列車の中で彼女はそつつぶやいた・・・

・・・ところ変わってここは幕府特別武装警察真選組屯所である。今日この屯所ではあるうわさで持ちきりだった。

「なあ、知ってるか？あのうわさ。」

「ああ、なんでも女隊員が来るんだろ？」

「副長の知り合いらしいけど・・・美人かなあ」

「いや、どうせコネで来るんだしブスに決まってるだろ。」

「それもそうか。」

なんてうわさしてる中さつき名が拳がった真選組副局長土方十四郎はいつも以上に眼を吊り上げいらだっていた。

「あいつ遅すぎだろ。10時には江戸に着くっつってたのに・・・」
イライラ

「まあ、落ち着けトシ。初めての街なんだ。少しぐらいいいじゃね
ーか。」

そう言つてニカツと笑つたのは局長の近藤勲である。局長になだめ
られたらさすがの土方も黙るしかない。「ったく・・・」あきらめ
たようにタバコの煙を吐いた。

第一話初めはやっぱりこんなものでしょ？（後書き）

どんな短い感想でもいいですのでお願いします。

第二話ヒロイン登場！！です。（前書き）

なんか前回読み直したらすごく中途半端でした・
読んでくださった方申し訳ございません< ++ >

第二話ヒロイン登場!!!です。

・ここは江戸歌舞伎町の一角にある某コンビニである。

ここに少し変わった男が入ってきた。その男は銀髪で、死んだ魚のような目そして和と洋が混ざったような妙な格好をした・まあ言わずと知れた万事屋銀ちゃんのオーナー坂田銀時である。

いつもだるそうな顔をしているが今日はいつもにも増してダルそうにしていた。

「ハア・・ったくなんだよ、ちょっと出遅れただけでもうないなんて・・俺のジャンプ。まったくこんな直射日光ガンガンの日によろ嫌がらせですかコノヤロウー。」

グチグチいいながら本売り場まで行くと目の前にあった。

最後の一冊が。

「あっ・・あつたあああ!!!俺のジャンプ!!!」

目を輝かせ飛びつこうとした時、手がニユツと伸びてきてジャンプを取ってしまった。

驚いてばつとその方向を見ると女性がジャンプを持っていた。

前髪で隠れてよく見えないが若そうだ。

「あの〜ねーちゃん？ちょっといい？」話しかけると

「何ですかあ？」ニコツと笑いながらこちらを向いた。

ブシャアアアア・・・その女性が想像していたよりもずつとかわいかったからか

それともいきなり極上スマイルを向けられたからからだろうか・・・いやまあ日光の当たりすぎだからかもしれないが・・・銀時は情けなくも鼻血を出して倒れてしまった。

「いやあ、もちもち、悪いねえ。もちもち」鼻にティッシュをつめながら銀時は言った。

あの後彼女は倒れた銀時を引っ張って外に連れて行き手当てをしてくれたうえ団子をご馳走してくれるというのだ。

「いえいえ、あたしが坂田さんのジャンプを取っちゃったからシヨツクで倒れちゃったんだし・・・気にしないで。」そう言つてニコツと笑った。

(うつそんな理由じゃあねーんだけど・・・)

「あつそういやあんた名前は？それにこの辺じゃあみかけねえ顔だがどっから来たんだ？」

「ん？あたしの名前はね・・・」

「キタカワセイホ？それが今日新しく入ってくる女隊士の名前ですかい？土方さん。」

「ああ、俺のむかしのなじみだな。」そのころ真選組屯所では土方が一番隊隊長の沖田総悟となにやら話していた。

「ふうん・・ほんとに女なんですわい。じゃああのうわさはほんとなんですわね？」

「ああ？うわさ？」

「ええ、土方さんの昔やつちまった女を真選組で面倒見なくちゃなんねえって言う・・。」

「あほかあ！！んなわけねえだろうが！誰だあそんなふざけたうわさ流したやつわ！！切腹だあ！！！」

「誰って・・そりゃあもちろん・・俺でさあ。」

「やっぱりか！そうだと思っただわ！」

「だって女なんかぜってえ入れなさそうな土方さんが入れるって事はそんな理由かと・・違えましたか？」

「違うに決まってるだろうがっ！」

「ええ〜。」「ええじゃねえよ！」そんなことを言っていると近藤が部屋に入ってきた。

「やめる総悟。」入ってくるなりまじめな顔してそう言うのでフオロ―してくれるのかと思えばこう続けた。

「いいか、総悟。男つてのは時にはどうしても責任をとらな・・・」
「んなわけねえだろがあああ！！」思い切り近藤をなぐってからふと思った。

（ぜんぜん進まねえなあ・・・）

第二話ヒロイン登場！！です。(後書き)

ほんとに進みませんね・・・

第三話口にものがはいつてるときはしゃべっちゃダメー！（前書き）

今気づいたのですが読みにくいですね・・

書き方を付けます！！

後、また団子屋に戻ります。

第三話口にものがはいつてるときはしゃべっちゃダメ！

土方達が屯所で騒いでるころ・・・

歌舞伎町のある団子屋に二人の男女が大声で争っていた。

通りすがりの人々は恋人同士のけんかかとも思うだろう。

こんな会話をしてるとも思わずに・・・

「だーかーらージャンプで今いきがいいのはやっぱりぬ○りひよ○の孫だつて！」と女性〓星螢が言う。

「いや違うね！それもいいけど一番はめ○かボツ○スだろ！なんたつてもうすぐアニメ化すんだからな！のりに乗ってるって。」と男性〓銀時は言う。

「でもぬ○りひよ○はもうかなりやってるんだよ？アニメってのは始まってからが大変なんだから」

「いやいや、そうだけどほ・・・」

「ってたびじよぶぶ!?!?」

まあ、すぐに大声をだし過ぎて二人共声がかららになつてきたので一旦休戦することになったが・・・

その後お茶を飲んでいると

「へっ・・・へくしょん!!!!」

「んっ、大丈夫か？」

「んっ誰かうわさしてるのかな？」

「で、マジなのか？真選組に今日入隊するってゆうのは。」

「そうだよ。北河星蚩ちゃんはめっちゃ強いんだから。」

ニコニコしながら細い腕に力こぶを作ろうとする彼女を見ながらさらに質問をした。

「てかよう、あそこって女は入れんのか？一人もいねーだろ。」

「トシくんが入れてくれるって言ってたもん！まあ、こっぴつコネがなくちゃ無理だと思っけどね。」

お茶をすすりながら答える。

トシってあいつのことだよなーと、面白くないと思いつつぱモデルからこんな知り合いがいるのかとも思う。

そこで疑問がわいた。

「第一さ、何であんなむさくるしいトコ入ろうと思ったわけ。あん

たならアイドルとかでもなれると思っぜ。」

「えゝそんなわけないよゝアイドルってかわいくないといけないんだよ?」

「あつあのなあ・・・」まるで自分がかわいくないみたいと言う星蛍にツッコミを入れたくなる。

なんだつて、こげ茶色の美しく長い髪、驚くほどに白い肌、スタイル抜群で銀に輝く大きな目

ここまで誰もがつらやむ物を持ちながらそういわれると皮肉にしか聞こえない。

「まあ、いいけどよ・・・そだお前今日いかねえとなんねーんだろ? まだ時間いいのか?」

しばしの沈黙。

「あ・・・ああああああ!!!!」そして絶叫。

あわてて耳をふさぎながら銀時は? 然とする。

「どどどどどうしよゝゝゝ!!!!10時に来いって言われてたんだつたゝゝおっ怒られる!」

そこまで言つとぱつと銀時のほづを向き直り早口で言った。

「ごめん! あたしもう行くね! それじゃまた今度!」

そこまで言いあつという間にはるか向こうに走っていった。
あつという間ではらくポカンとしてたがやがて重大なことに気が
ついた。

「団子代もらってない……。」

第三話口にものがはいつてるときはしゃべっちゃダメ！（後書き）

こんなもんでどうでしょう？

次は、土曜日に更新したいと思っています。

ご感想お願いします。

第四話鬼の剣刃いざ参らん！（前書き）

うっ・・・読み仮名の書き方がわかりません・・
誰か教えてください<:;:>

第四話鬼の剣刃いざ参らん！

コツ・・コツ・・コツ・・

男は逃げていた。

ーやばい・・やつが来る・・やつが・・

男は疲れていた。上の者にひたすら酒を飲ませゴマをすり・・もちろん自分も飲んでいた。

そして憔悴しきったところに奴等はやってきた。

ー悪魔だ・・あいつは悪魔なんだ・・

男はまださつき自分の身に起こったこと二いまいち現実味を持ってなかった。

奴等は宴会場にいきなり入ってき仲間を次々と斬っていった。

誰が言ったんだらう。逃げろ、と自分が言ったのかもしれない。

やつは最初はおとなしかった。だがやつは一人の・・そう一人の悪魔が傷つけられた時に変貌した。頬に銃弾がかすっただけの傷だった。

ほかの悪魔が傷ついても見もしなかったのにその悪魔に傷がついた途端変わった。

やつは舞うようにして仲間を壊していった。

真選組屯所である。

しかしここに、容姿端麗、スタイル抜群のスーパーレディがやってきたらどうなるだろうか。

まあ、もちろん・・・

「おはようございます！！北河隊長！！」隊員たちが整列して部屋の前に立っていた。

「お・・・おはよう・・・」・・・こうなることだろう。

星螢は部屋を出てすぐいきなり隊員たちからのおはようコールに戸惑いながらも笑顔で返す。

そして目がハートになっている隊員たちが邪魔でご飯食べにいけないアと思うところに一番隊長の沖田がバズーカをぶっ放し登場というのが星螢が来てからの毎朝のスタイルだった。

「おはよう、総悟君。今日もありがとね。」

「いやあ、この位あたり前でさア。にしても毎朝毎朝あいつらもこりねえですねエ。」

「ふふ、そうだよねえ。てゆうか大変だね、隊員さんって。毎朝自分の隊長を朝起きるの待たないといけないなんて。」

「・・・いやいや義務じゃねえですから・・・」

などと話しながら食堂にいき、「あつトシくん！！おっは〜」

「ん？ああ。」土方はご飯を食べながら返事をした。

「今日もマヨネご飯？それおいしいの〜あたしも真似しようかなあ」
今日も土方の前にはご飯にマヨネーズをとぐるじょうにかけた通称・
土方スペシャルがある。

「だめですよ、星蚩さん。こんなもん食ったら脳みそ腐ります。て
か土方さん。それ星蚩さんの前で食べんのやめてください。真似し
てあんたみたいないたい人になったらどうするんでイ。」

「誰がいたい人じゃこらア！！つか悪影響及ぼすんだったらてめえ
だろうがあ！！！」

「ねえ、これ結構おいしいね。」

「俺の食うなあ！！！」

「あゝあ。けがした責任とって死んでください。」

「お前は何かにつけて俺に死んでほしいだけだろうがあ！！！」

ギャーギャーやかましい三人を見て隊士たちの一人が言う。

「でもよう、こつみたら普通の女子なのにさ。あんとき怖かったよ
なあ。」

「ああ、あの攘夷浪士たちが宴会場に乗り込んだ時だろ？副長に銃
弾がかすっただけなのになあ。」

「そうそう、知ってるか、あの後北河隊長がなんて呼ばれてるか。」

それはな、と行って一度きってから続けた。

「鬼を護る剣の刃のような存在でどこぞのお姫様のような可憐な容姿・・・鬼の剣刃・・・」

鬼刃「ヒメ」

真選組三番隊隊長・北河星蝨「キタカワセイホ」は鬼刃と呼ばれるようになった。

第四話鬼の剣刃いざ参らん！（後書き）

ごめんなさい・・・土曜日とか言っというて日曜日なうえ内容
これじゃあだめですよね・・・
でも感想・評価はほしいです！

第5話自己紹介は簡潔に（前書き）

ガーン!!そ・そんなどうして声優ランキングに杉田さんと中井さんがはいつてないんだ~~~~!!ちよつとシヨツクです・
<ー・・・<

エドの声優さんは好きです。

第5話自己紹介は簡潔に

屯所―

ざわざわざわ

「えーみんな静かに！」近藤は立ち上がり言った。隣には土方が座っている。

これから始まるであろう事に隊士たちは浮きだっている。大体静まったところで続けた。

「えーみんなもう知っていると思うが、今日来る隊士はしらねえ奴がいたら困ると思うのでな、軽く紹介することにした。」

そついい、入ってくれと戸の方を向いた。

シーン……

あれ？まだ入ってこない……え？てか心の準備できてたのに……

異様な空気が出てきたころ、

ドタドタドタドタ

騒がしい足音が聞こえてきた。

やっと来るみんながそう思ったとき……バン！！！！

あの大シャウトの後ひとまず静まり返りその美女に「わりイ。てきと」に自己紹介してくれ。」
と言い、隊士達の注目が集まる中で、

「えつと・北河星蝋、B型のおうし座、趣味は戦うk・散歩です」とまあにこやかに返した。

そして現在みんなの強い要望で起き上がった近藤に宴会の許可をもら^{い取った}ったのだ。

「それでね北河さん・」いやこつちの話をきいてくだ・」いやこつちだ

今、みんなで星蝋を囲みしゃべっている。それを星蝋はにこやかに聞いているのだ。

「すごい人気ですねイあの人、土方さんは行かなくていいんですか
イ？友達なんでしょう?。」

沖田は茶化すように言った。

「かんけえねえだろ。」土方はわかっているのでそっけない。

「ちえっ！ああいう風にアホ面下げてること見れるかと思ったのに・
ほんとにいいんですかい?。」

「ほっとけつて言ってるんだろ！つか、ちえつて言っな、ちえつて！」
「ちっ!」「おまえな・」

こんなやり取りをしていると沖田の前に影ができた。「誰でイ・・・!?」

目の前に星蛍がいた。じつと見ていると思えばニコツと笑った。

「な・・・なんですか・・・ってわば!？」いきなり沖田を胸にうめた。

隊士達が目を見開いたが気にせず土方のほうを見て言った。

「かゝわゝいゝ!!トシくん以外は全員むさくるしい男かと思ったらこんなかわいい子もいたんだね。名前は? 年齢は? どの子?」

目をきらきらして尋ねる星蛍に胸元を指差しながら言った。

「そんなん本人に聞け。・・・あと死ぬぞ、そのままだと・・・」

へっ?と見て見ると沖田は苦しそうにタップしている。

「あつごめん! 大丈夫?」沖田は苦しそうに咳をしてから文句を言おうと思つて顔を上げたが、銀色の瞳を見ていると豊富な胸の感触を思い出してきた。

赤くなりながら「大丈夫でさア・・・」そう聞くと「よかつた! これからよろしくね!!」と極上スマイルを見せた。

何かが目覚めた瞬間だった。

その後から沖田は星蛍に近寄ってくる男を散らしたらしい・・・

くおまけく

しくしくしく

男が一人泣いていた。

星蛍に蹴り飛ばされたのに誰も気にしなかった人物・・・

「おれのこととはどーでもいいの・・・？」

近藤は一人泣き酒を飲んでいた。

第5話自己紹介は簡潔に（後書き）

近藤さん出すタイミングを見失いました・・・

第6話 団子屋って時代劇に一回は必ず出るよね(前書き)

よく考えたら銀魂って00話とかじゃなくて00訓ですよ。
替えようかな・・・

第6話 団子屋って時代劇に一回は必ず出るよね

ここは江戸歌舞伎町、この町の某コンビ二に銀髪、天パ、死んだ魚のような目に和と洋を交ぜたような服を着た一風変わった男が入ってきた。

「ハア…ったくなんなんだよ。こんな直射日光ガンガンの日にジャンプがどこも売り切れなんてよ。嫌がらせですかコノヤロウ…っつてデジャブ？」

銀時はそっぴいやあいつに会ったのもこんな日だったな、と思い出し出会った場所…雑誌コーナーに足を向けた。

「オッあつた！また最後の一冊だな…」 いやな予感を抱きつつ銀時はジャンプを取ろうとした。

その時白い手が伸びてき、今、手に取ろうとした物がなくなった。

「な!？」 ぱつと後ろを振り返ると見覚えのある黒い服に身を包んだ美女…

「「あつ…」「星蛍がいた。」

「……………」

「え〜っつと…久しぶり！」 「おお、久しぶり…じゃねえよ!…!」「べしっ

「にぎゃ！だからごめんって言ってるじゃないのさア」

ここは前回きた団子屋である。銀時はすごい剣幕で怒鳴る。

「オラアおごるつつつからけっこうな量食ったんだよ！てかお前のほうが食ってたし！おかげで俺の財布はお前の脳味噌みたいにするからかんだよ！」

一気にまくし立ててそう言つと星螢は頬を膨らまして言った。

「そこまで言うことないじゃないかア！それにおごってあげるって時にだけたくさん食べるのは大人としてどうかと思うよ！」

「うつ・・・」　そういわれると少し情けない気もするので黙ると、星螢はうれしそうに笑って言った。

「まあ、おごってあげるって言っておごらなかつたのはあたしが悪いから・・・ハイっ！」

星螢はごそごそと地面においていた袋から小さな包みを出し銀時に手渡した。

「なんだこれ？」　訊くとふふふと変な笑みを浮かべていった。

「それはね・・・あたしの手作りクッキーなのだ！実は今日この前知り合った女の子と会う約束があるからクッキーたくさん作ってきたんだ。」

よく考えれば星螢は隊服を着ている仕事はいいのかと思ったがそうするとまた団子代を立て替えさせられるので黙って懐にしまつと少

し気になってたことを訊いた。

「で、どうなの居心地は。」　そう土方が知り合いなので何もしてはこないだろうが彼女は男しかいない処で寝泊りしているのだ。

だが当の本人は何も思っていないらしく、

「居心地？別に普通だよ？いやすごくいいかな～みんな優しいしおいがあるもしろいし総悟くんはめっちゃかわいいし・・それに何より・・トシくんはずっと一緒にいられるの～～～!!」

最後のところは目がハートである。

沖田がかわいいやからかいがいのある人とかいったのはあえて訊かずに

「もしかしてお前・・あいつのこと・・好き・・とか？」

「そうだけど？」

恐る恐る訊く銀時にあっさりところ返した。そして軽くショックを受けている銀時を気にせず続けた。

「あたしがここに来た理由はトシくんのためだよ。この力ちからを使ってトシくんの役に立ちたかったから・・」

「力？」まだショックを引きずりながら聞くと星螢は少し微笑みながら返した。

「力というか・・あたしは、夜兎だから。」ショックなど吹っ飛んだ。

「は？・・・えつとつまりこういうことだな？お前は夜鬼で、そのすごい力であいつを護るためにここに来た・・・と？」

「うん！そういうこと！とはいってもハーフだから日に当たっても平気って言う御都合主義なんだけど

「ええエエエエエエエ！！」

「そ・・・そんなに驚かなくても・・・」

「驚くわ！マジかよ・・・じゃああいつと同類・・・」銀時は自分家に住んでる少女を思い出した。

「あいつ・・・？あ！来た来た！おいこっちこっち！カグラちゃーん！！！」

（ん・・・？カグラってまさか・・・）

「あつ！星姉ちゃん！このダメガネがもたもたするから遅くなったしまったアル。ほら謝れヨ。」

チャイナ服を来た少女は後ろにいる眼鏡をかけた少年に言う。

「神楽ちゃんが準備に手間取ったんだろ。僕のせいにしないでよ・・・ってあれ？隣の人・・・」

二人は近づいてきて星蛍の隣にいる人物にきずいたようだ。

「どうしたアルか新八。星姉ちゃんの美しさに頭パンクしたアルか

ひどい言われようであるが逆らうと本当にやりかねないので銀時は黙っておく。

「で、お前らはどうやって知り合ったんだ？」と訊いた。

「それはね………」

もったいぶった後こう宣言した。

「次回に続く!!!」

第7話 団子屋って時代劇に必ずとっていらほや出してくるよね(前書き)

ふーやっと言きました。

テスト一週間前なのになにやってるんだろ・・・

第7話 団子屋って時代劇に必ずとっていいほど出てくるよね

「え〜つと・・・話すと長くな・・・りはしないけど話すのめんどくさいからカクカクシカジカでいい?」

「ダメに決まってるでしょうがアアアア!ただでさえこんなしよ
うもないネタひぱってるですよ!きちんと説明してくださいよ!!
ねえ銀さん、神楽ちゃん。」

無茶苦茶なことを言う星蝋に「銀魂の良心」駄眼鏡しんぼんちがつこつむ。

「てか逆ウウ!いや逆って言うのもおかしいけどせめて読み仮名を
ダメガネにして・・・ふ〜オオオ!」

新八が前に吹っ飛んだ。

「うるさいアル。話進まないし誰もお前の話なんか聞きたくないネ。」

「そうだぞ、ぱっつあん。ここはスルーしてさっさと進むトコだろ。」

「全く空気の読めないやつネ。だからお前はいつまで立っても新八
アル。作者もシンパチって打つてもちゃんとならないからシンパチ
って打ってるアルよ。」

「関係ないじゃないかアアア!」

「いやいやあるよ。だって出番減らされんじゃん。つついしんぱちって打っちゃったらイラッてすんじゃん。」

「空気読んでここはジャック＝スパ郎とかに変えるべきアル。」

「もつと出番なくなるわ!!」

銀時と神楽がこれでもかという位にいびり倒す。盛大に突っ込むべきか悩んでいると新八の隣でバキツと音がした。驚いて見てみると星螢が湯飲みを・・・いや湯飲みだったものを持ちぶるぶる震えていた。

「・・・進まないって・・・言ってるじゃなアアアアい!!」

まさかの星螢の大シャウトだった。

「全くもう!ぜんぜん話が進まないじゃない!」

ぶんぶん怒る星螢を見て新八は感動していた。

(星螢さん・・・ポケ担当かと思ったらツツコミもOKなんだ・・・)

「わりい。」 「ごめんアル。」 素直に謝る二人。

「よろしい。えっと、それじゃあ話すのめんどろうなんで * の後をどーぞ」

結局それかよオオオオオ!! ツツコミは僕しかないんだな... 確信した新八ツツだった。

*

「定春早く来るアル！今日も一番乗りネ！」 神楽はたいてい朝一番に公園に来ている。

ちなみに、定春というのは万事屋のペットで白のめちゃくちゃ大きい犬だ。ただのドでかい犬かと思えば犬神っていう設定もあったりする。

友達が来る間ブランコにでも乗っていようと神楽は足を向けた。

しかし、いつもは無人のブランコに誰かが乗っている・・・いや乗っているというか回っている。

普通はがんばってもせいぜい180度位なものだろう、だがそのブランコは、360度回転しているのである。

夜兔族の神楽でもこんな360度高速回転ブランコ…高速回転ブランコいや、高回ブランコ見たことがない。

呆然としていると速転ブランコに乗っている人物が神楽にきずいたらしい声をかけてきた。

「だれエエエかいいイイのオオオ！たすウウウけてエエエ！！」
「どうやら若い女らしい。」

叫び声で我に返り定春を呼ぶ。

「わかったヨ！1、2、3で手を離すアル！定春がうけとめるネ！」

「フアアアイイイ！！」　　せーので数える。「いちーにー
てエエエイイイ！！」・・・えええ！」

女性は2で離してしまつたようです。すごいスピードで飛んでいく。
定春を走らせて入るが間に合うかどうか分からない。神楽もダツシ
ユで落ちたであろう付近に走る。

すると前から定春が黒い影を乗せて走つてきた。

「よかつた！間に合つたアルな！」　大丈夫かと駆け寄るとその人
物はがばつと神楽を胸に抱き言つた。

「ありがとう！！ちよつとこぎ過ぎて止まなくなちゃつて…たす
かつたア。えつと…名前は何？」
神楽はどうにか胸から抜けて言つた。

「この位お安い御用ネ！無事でよかつたアル。私は神楽、おねえち
ゃんは？」

「あたしは北河星蛸。ありがと神楽ちゃん。」

「それでその後二人は・・・ちよつとストロップ！ちよつと待て
！」
ここまで話した時銀時がストップをかけた。

「なにアルか？その後いろいろ話して仲良くなつたつた・・・で終わ
リアル。ちよつと待つヨロシ。」

「わかつた、わかつた。もうそれでわかつたよ、で、一つお前に聞

きたいんだけど・・・」
と、星螢を見て言う。

「なにー？」 少し眉をひそめる星螢。

「さつき少しこぎ過ぎて気がついたらえーっと高回ブランク？にな
ったつってたが・・・」

「ああ、なんだそんなこと？ そうなんだよね。いつの間にやら回っ
てて。」

銀時は呆れたような顔をした後言った。

「お前って正真正銘のアホだな。まあそんな気はしてたけどほんと
馬鹿・・・」ゴギツ

馬鹿といわれるのは腹立つ、と銀時の指を曲がらないほうに曲げて
から何もなかったように言った。

「にしてもあの時は驚いたな。夜兎って見た目は人間っぽいから
われるまで気がつかなかった。」

「わたしもアル。でも星姉ちゃんはハーフだから日に当たれるアル
な。」

うらやましそうに言う神楽に苦笑しながら言う。

「そうだけどあたしは地球産の夜兎だしハーフだし。生命力とかは
純血の夜兎のほうがずっとあるよ。」

「でもどうやって星螢さんって生まれたんですか？」 ずっと黙っ
てた新八が口を開いた。

「う・・生まれ方・・？」 何を考えたのか星蝿がつるたえる。

「い・・いやそう言う意味じゃないですよ！ただ星蝿さんが生まれたのはまだそんなおまんこに天人来てないんじゃない？いや来てます？」

ぱっと身は十代にも見える容姿なので年齢層がよくわからない。そう言うとうれしそうに笑っていった。

「いやいや、うれしいけど夜兎なんか今でもあんまり来てないよ。それに齡は銀さんとあんま変わらないしね。

お母さんがどつかの戦士で地球に不時着？したんだって、それで地球のお父さんの間にあたしが生まれたの。」

懐かしそうに言う星蝿に新八がその後どうなったのか尋ねる。

「4歳のとき二人共死んじやった。周りの反対押し切って生んだものだからだれも助けてくれなかったけど。」

「あつすいません。こんなこと・・」 新八があわてて謝る。

「ううん。訊いてくれていいの。だって幸せなことは訊いてほしいものでしょ？」

「幸せなことか？」 銀時がつぶやく

「うん！だってここからトシくんと暮らし始めたんだもん！誰も助けてくれなかったのに、ド貧乏なトシくんが、

好きな人に拾われることは幸せでしょ？だからあたし護るって決めたの。バカだけどこの血を使って。」

そこまで言つと思ひ出したようにあわてる。

「ああっ！もうトシくんが見回りから屯所に戻ってる時間じゃないか！あたし帰るね、あっお金は置いてくから楽しかった〜じゃあね〜！」

一気に言つと返事も聞かずにダアツと帰って行ってしまった。

「ハハ、言っちゃいましたね。銀さん」

「ったく。まあ団子代置いてただけましか。」

「銀ちゃん、私今度おごらしたら許さない言つたアル。」

「ところで、ジャンプ買いにいかねえとな〜」

「あつ待つアル〜！」

「待つてくださいよ！銀さん、神楽ちゃん！」
3人は走っていった。

それを見ていた影が二つ。

「「出番がぜんぜんないなア〜」」

第7話 団子屋って時代劇に必ずといっていいほど出てくるよね(後書き)

最後の二人は近藤さんと山崎です。

次回は屯所の予定ですから・・・

第八話 一度でいいからケーキバイキングに行ってみたい（前書き）

更新遅れましたアアア！！

先週テストでして・・パソコン禁止されてました。

こんなとき携帯があればこっそりできるのに・・・
すいません<><>

第八話 一度でいいからケーキバイキングに行ってみよう

カカカトントン まだ少し薄暗い早朝、屯所の台所で一人の女が動き回っていた。

動くたびに耳の横に残したこげ茶の髪が揺れる。

瑠璃色のスリットの入ったチャイナ服に、山吹色の生地茶色の紐を腰に結んだシンプルなエプロン。

その姿で鼻歌を歌いながら台所に立つ姿にはまるで新婚のお嫁さんのような雰囲気がある。

彼女はじつに手際よくまんじゅうの生地にあんこや、クリームなどをつめていく。

ほかにも作っているらしくオープンから甘いにおいがもれ屯所中に広がる。

この男ばかりの屯所でこんなことは今まで一度もない。どうしてこんな事になっているかという話は昨夜に遡る。

.....

「北河隊長、これどうぞ！京の土産です。」

そういつて九番隊隊士の一人小野寺が、最近入隊した三番隊の女隊長、北河星螢に京まんとロゴの入った箱を手渡した。

かわいそうな小野寺^{オヤジ}。

小野寺の断末魔の叫びを聞き流し、星蚩は瞳をキラキラと輝かせていた。

――

で、現在に至るわけである。

そうした経緯がありチャイナ服の女もとい星蚩は朝早くからお菓子作りに励んでいるのである。

屯所中に甘い匂いが漂い始めてから少しして台所に一人の青年が入ってきた。

「おはようございます。星蚩さん。」

声をかけてきた青年にぱつと笑顔を向ける。

「おはよ！総悟くん！今日はずいぶんと早いね。あつトシくん起こそうと思って早く起きたの？」

一番隊隊長の沖田総悟は、星蚩の世界一大切な男土方を暗殺しようとする男である。

が、その場面を見たにも拘らず「仲がいいね。」と笑って言い全く事実にきずかない。

早く起きるときは大抵そうゆうときなのだが全くきずかない。

「そう思っただんですがね。なんだか甘い匂いが・・・なに作ってる

んですかイ？」

「あつそれがね！聞いて聞いて！昨日ね

」

瞳を輝かせながら矢継ぎ早に話す星蛍の話はわかりにくかったのだが、何とか理解しなるほど、といった。

「それでいっぱい作ってんですねイ。でもあいつ一人には食いきれませんぜ。」

その多さといったらケーキバイキングできそうな量である。

「大丈夫！あたしも食べたいからいっぱい作ったんだよ。」

確かにこの前どのくらい食べれるのかと宴会で『10分間わんこカレー大会』を実地したところ大なべを空にしていた。

（しかしそうになると俺が食えないじゃねえか・・・何とかならねえもんだろうか・・・）

星蛍は思案顔の沖田を不思議そうに見ていたが思いついたように笑っていた。

「でもこんなにたくさん二人で食べたりすると太っちゃうから・・・総悟くんも食べてね？みんなにも分けようか。」売らうと言ってからあつ焼けた〜、とつぶやいてオーブンを覗きにいった。

「やっぱあいつには勿体ねえなあ。」 ぼそりといった。

「今日の朝飯は北河隊長の手作り菓子だアアアアア!!」と誰が言ったかそんなこと食堂には朝からお菓子がたくさん置いてあった。しかし隊士全員がおなかいっぱいになる量ではない。前方で争うように食べている中、

後ろの方の席に土方と星蚩がいた。

「どおどお?おいしい?」星蚩が訊いた。

「まあまあだな。」土方はそっけなく言う。

「マヨと合ってる?」

「まあまあだな。」

「何でまあまあとしか言わないの!」身を乗り出して言う。

「まあまあだな。」

「答えになつてない!」

するとやっと土方は星蚩のほうを向き軽く怒りながら言った。

「だから昨日俺がいったこと知ってたろうが!わかりきってる」と訊くんじゃねえよ!」

昨日小野寺オヤジが言っていたこと『菓子だけは絶品だって・・・』

思い出すと満面の笑みを浮かべていった。

「作ってよかった!!」

本当に素直じゃないんだから……おいしい

ならいいけどね

第八話 一度でいいからケーキバイキングに行ってみたい(後書き)

あ・・・近藤さん出せなかった

第九話 美女と野獣は結構多い(前書き)

初めての2日連続投稿ですね<^0^>

というのも次の次の話(11話)から長編書いてみようかと思って
います・・・

詳しい事は10話でお伝えいたします<>>>

第九話 美女と野獣は結構多い

「近藤勲いそひつじまだ一度しか出ていない真選組の局長である。

部下からの信頼も厚く、頼れる人物である。

だがしかし、誰にでも欠点というものがある。そう完璧な人間などいないのだ。

「もう、まったく！局長がサボったりするから今日は歌舞伎町の見回りだったのにいけなくなっちゃたじゃないか。」

ある日光のきつい昼間に灰色の傘を差した黒い隊長服姿の星螢がブツブツいいながら歩いていた。

なぜ機嫌が悪いかというと近藤のいつものあのせいで土方に走らされているのである。

「だいたい居場所がわかってるなら、電話とかすればいいじゃないか。連れて帰って来いって……」

事情を知らない彼女が着いたのは恒道館道場と書かれた広い屋敷の前

(……?)

「すみませーん！局ちよ……近藤さんいますかあー。」返事はない。

「すみませーん！！」さっきより大きな声で言ったがやはり返事は

「かわいいなんてそんな照れるじゃないかア。」うれしそうに言う。
「だけでもう女の子じゃないよ？あなた位までだよ？そう表現するのは。」

「えっ、私と同じくらいでしょ？」 「いやいやまさかもう二十代半ばだよ。」 しばしの沈黙

「にしてもスタイルいいですね・・・どうしたらそうなるんでしょうかねえ？」

溜息交じりに訴える彼女に微笑みながら言う。

「ありがと。でも大丈夫！！たくさん食べて飲んですれば○姉妹も夢じゃないって！！」

ねっ、とスマイルを見せる星蝿に「ありえないけど星蝿さんに言われるとうれしいです。」と苦笑する。

「あっ、ところで名前は？年齢は？」

あらい言い忘れてたと、少しあわてて自己紹介してくれた。

名は志村妙しむらたえといい、父の残した道場復興のために十八歳ながらキヤバクラで働いているという。

「すごいなア。いやほんとえらいねえ。まだ胸も成長していない内

から・・・」

「成長してないんじゃないやなくて成長しなかっただけです。」

「そんな健気な妙ちゃんにお土産の破亜限墮津をあげよう！」

「わア！ありがとうございます。私好きなんです。」

「たくさんあるからあたしに遠慮せずにごん食べてね！」とい
いながら目はアイスしか見ていない。

「ふふふ、一緒に食べましょうよ。せつかくたくさん買ってきてく
ださったんですし。」

「わーい！ありがとうございます」ガバツ

「もう星蛍さんたら子供みたいですよ。」妙は笑いながら言う。

もうどっちが年上かわからない。とゆうか星蛍が年上には全く見え
ない。

楽しそうに話す二人の頭に近藤のことは飛んでいた。そこに忍び寄
る影・・・

影ー近藤は星蛍の肩に手を置き後ろから「俺のこと、忘れてるだろ
オオオオオ！！」と言った。

「あ・・・ごめん・・・」

「てかお妙さんひどくないっすか！？俺がアイス渡しても『一緒に食べましよう』なんていつてくれないのに！ひどいひどいひどいひどい・・びごオオオオ！！」

ひどいをひどく連呼する近藤に妙がアッパーカットを喰らわす。

「お前と星蛍との優遇のさは当たり前えだろうがア！！迎えに来てくださっただぞ！！」

「ああ、そうそう、。それでなんで局長ゴリラはここに・・・」
まだ殴られている近藤に聞く。

「それはこのお妙さんを護りにきてだな・・・」

「違うだろうがア！！お前が勝手にストーキングしてるだけじゃねえかアアアア！！」

星蛍の顔が固まった。
えっ・・・まさかね？局長がまさかね？まさか・・・

「もしかして局長ゴリラ・・・ストーカー・・？」

「いや、だから俺はいつもお妙さんを近くで護ってるんだって。後ゴリラって呼ばないで何気に」

「それを・・ストーカーと言っじゃアアアア！！」「ドゴオン！！」

妙はさらにヒートアップする。

「いやいや待って、ってあれ？いつもよりきつくはない？あつ星蛍助けて〜！！」

「局長ストーリーさん。あたしね別に誰が犯罪してようが別にどうだっていいの。」

でもね、と続ける。手には傘をつしかりもって。

「あたしが一番許せないのは……」少し遠くから助走をつけてこっちに走ってくる。

「友達とトシくんを困らせることだアアア!!」 ドガアアアアアア
ン!!

とび蹴りをお見舞いした後二人の制裁は土方が電話をかけるまで続いたという……

第九話 美女と野獣は結構多い(後書き)

この話は結構前からパソコンに書いてあつたんですよ。

打つのめっちゃ遅いので話できてもなかなかです。

だから2日連続なんてなかなかできないんですよ。く ^ 0 ^ >

第十話 話すときは蕎麦は飲み込んでからにしろ（前書き）

遅くなつてほんとすみません!!

えっお前なんか誰も待ってないって?なんて言わないで!

長編のお知らせは後書きで!!

第十話 話すときは蕎麦は飲み込んでからにしろ

ダツダツダ 「うるせえな。」土方は自分の部屋で書類整理をしながらつぶやいた。

副局長という役職なのだが毎日ストーキングにいそしむ上司のおかげで仕事はかなりの量だ。

特に今月は女隊士という異例の入隊もありいつもより多い。余計にイライラする。

バン！ 溜息をつきかけた時、襖が開いた。

「副長！ たった今やつが目撃情報が入りました！」

「本当か！ どこでだ？」溜息もぶっ飛んだ。

「えっと何でも芭寡陀^{バカダ}商店街ってトコの八百屋の前で見かけたそうです。」

芭寡陀商店街というのはここからはそう遠くないが大きいことで有名だ。

「その付近にいる奴はとりあえず全員向かわせる。怪しい奴がいたらすぐしよつ引け。俺も・・・」

いくと、言いかけて気付いた。自分の周りに散乱している書類の量、明日までに仕上げなければならない

のだが、今行くと間に合いそうにもない。

チツと、舌打ちし部下に言った。

「俺は今出れそうにねえ。つってもお前らだけじゃ見つけた時あれ

だからな。頼りねえがあいつに行かす。とりあえずそう連絡してくれ。」

「わかりました！で、あいつって誰ですか？」

「今そこいら辺にいて高戦力になるやつだよ。」そう言ってタバコの煙をゆっくり吐き出した。

「……………」

チャ〜チャ〜ズルズルチャチャ〜ズルズルチャチャチャ　あ
る蕎麦屋で話題のコマーシャルソングの着信音が蕎麦をすする音と
交互に聞こえてきた。　が、なかなか鳴りやまない。

音の発信源　　白い携帯の持ち主であろう人物は食べるのをやめな
い。

たまりかねて隣の席に座っている男が声をかけた。

「オイ・・・携帯鳴っているぞ。」

「え？あたひの携帯？」蕎麦を口に入れたまま携帯の持ち主　星
蛍は目を瞬かせた。

「……………もしもし？」　『もしもし？じゃねえよバカ！！何回鳴ら
せんだ！』

「あはは、ごめん。」　星蛍に電話をかけた土方はとりあえず
怒鳴りつけ少し落ち着けてから訊いた。

『今どこにいった？』 「え〜っと・・・ヤマノシンです。」 『は？何だそれ。』

「ふふふ・・・なんとねあたしはあそこあそこにいるんだよ！」

『あそこ？』 重要な場所なのかと、息を呑み続きを聞くと・・・

「なんと今あのそば処 山の神に・・・」 『蕎麦屋かよ！！』

「蕎麦屋じゃないよ！おいしいそば処そばだよ〜。」

『んな情報いらねえよ！その周辺に桂がいんだよ！あとそば処そばじゃなくてそば処そばだろ！』

「へえーそーなんだー。（おいしい話しかと思ったのに）」

『興味をなくすな、とにかくちやつちやつと食って搜索しろ。白い変な奴が近くにいる写真メールで送るわかったな？』

「うん。わかった〜。あっおかわりくださいーい！」 『頼むなアアア！！』 ピッツーツーツー

「よし！じゃあすぐ（食べて）探しに行こうつと。」 「うんうんと頷きながらつぶやいた時・・・」

「あの、すみませんお蕎麦きれてしまって・・・」 沈黙・・・

・・・ガーン（これは何？やっと小説かけたのに保存するの忘れたア並にシヨック・・・）

強風の中だが。

「一度言ったことだ。侍に二言はない！しかし同じではないからな、すまない。エリザベスお前も謝れ。」

エリザベスと呼ばれた白い生物は『ごめんね』と書かれたプラカードを出した。

「ふふっかわいいですね〜エリザベスちゃんって。」どの辺を見たのかそう言った。

「そうだろう！かわいいだろう！みな照れて本当のことを言わないのでな、そう言われたのは初めてだ。」

「ええっ！？照れ屋さんが多いですねえ。」星螢はしみじみといった。

「うむ、そうなんだ。しかしこいつはかわいいだけではないのだぞ。裏の顔もあるのだ。」

こんなやり取りのあと二人は気が合うらしく長話をしていた。もちろん星螢の頭から桂を探すということはとっくの昔に消えている。

しばらくバカ話をした後エリザベスが『桂さんそろそろ会合の時間ですが・・・』と書いたプラカードを出した。

「もうこんな時間か。すまないが用があるのでなそろそろお開きとしないか。」

「そっかあ。残念でもたのしかったよ！じゃあ最後に一つだけ。」

そう言つと携帯を取り出しいくつか操作した後メールを見せた。

「ん？これは・・・」男〓桂の顔が引きつった。それは桂の指名手配書だった。

「ど・・・どうしてこんなものを・・・」 「実はね、あたし真選組なんだ」。さらに引きつる。

「で、非番なのにもかかわらずトシくんはこの人探せって言われて・・・え〜つと・・・けい？「けいじゃない桂だ！！」・・・桂^{カツラ}さん？」
つい言つてしまった

「かつらつて言うんだね・・・最近の名前は読めないね。まっ、とにかく本人なんだよね、ツラ君。」

「ツラじゃない桂だ！・・・あれ？」 何でもないことのように言い二人に大人びた笑顔を見せる。

「ちつちつち！このあたしにわからないことなど無いのだよ。あなたがこの桂小太郎さんなんでしょ？」

桂と訊いてわかったのにも拘らず上から目線で訊く星螢にばれたのなら仕方ないとあきらめ首を縦に振った。

「そつかそつか。素直でよろしい！だから会合行つていいよ。」
あっさり言つた。

「は？そ・・・それはどういうことだ？俺を捕まえるのが仕事じゃないのか？」

「そうだね仕事の日だったらそうしないといけないね。でもねあたしは今日休みなんだよ。休みの日にできた友達を捕まえたりしたくないもん！」 仕事と休日をごっちゃにしないの！と胸を張る星螢に桂も苦笑する。

「そうか、ふっそうだな。では俺もお前を斬るわけにはいかぬな。」

「でも仕事のとき会ったら容赦しないよ。」ニッコリ笑う星螢に桂も言う。

「ああ、そのときは勝負だな。鬼刃ヒメこと三番隊隊長北河星螢殿。」
星螢は少し驚いた顔をしてから

「そうだね、狂乱の貴公子こと桂小太郎さん。」と言った。

桂は一言残しエリザベスと共に去っていった。

桂は

「火の鳥に気をつける。」

星螢にそう告げた。

第十話 話すときは蕎麦は飲み込んでからにしろ（後書き）

そのころ土方は・「遅い・・・」 イライラしていた。

え〜つと・・・どうでしょ？

感想・意見お待ちしております。

って終わらせたらいけないのだった・・・

でもお知らせと言ったら次から長編やります！で終わりますしね・・・

え〜つと・・・今回は万事屋出ません！でも読んでください！！

がんばります<>O<>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9933x/>

銀魂～鬼刃の日常～

2011年12月18日08時49分発行